「目を覚まして祈る（いつも目を覚ましていなさい）」

ルカ 21:34-38

2020.11.8 南与力町教会

序：文脈

イエス様が語られた終末（世の終わり）に関する説教を学んできました。今日はその最後のところです。また今日の箇所はイエス様の神殿での教えが終わるところでもあります。21 章 37 節、38 節には次のようにあり餡巣。

「それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行って「オリーブ畑」と呼ばれる山で過ごされた。民衆は皆、話を聞こうとして、神殿の境内にいるイエスのもとに朝早くから集まって来た。」

民衆は皆、朝早くから起きて、神殿にいるイエス様のもとに集まってきました。イエス様の教えを聞くためです。私たちもそのように熱心にイエス様の教え、御言葉に耳を傾けたいと思います。

１．心が重く鈍くならないように

イエス様は終末に関する説教の最後で何を語られたのでしょうか。

21 章 34 節

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲うことになる。」

「その日」とは「終わりの日」、人の子であるイエス・キリストが来られる日です。イエス様は今日の箇所の前のところ、21 章 29 節から 31 節で次のように語っておられました。

「それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」

「これらのこと」すなわちイエス様がこれまで語ってこられたようなこと（終末の徴）が起こるならば、それを自分で見て、「神の国は近づいた」と悟りなさい。そのように勧めておられたのです。そうするならば、基本的に「その日」が「不意に、突然」やって来る、ということはないはずです。しかし、それにも関わらずイエス様は今日の所で「さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲うことになる」と注意を促しておられます。弟子たちにもなおそのような危険があるということです。そしてそうならないためにどうすればよいかをイエス様は今日の箇所で教えてくださっています。

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい」とイエス様は言われます。ここで「注意しなさい」と訳されています言葉は、原文では「自分自身に注意しなさい」という言葉です。前の所ではこの世界に起こることを見たら、「神の国は近づいている」と悟りなさい、と言われていました。それゆえ私たちはこの世界でどういうことが起こっているのか、イエス様が語られたようなことが起こっているのか、注意して見ていく必要があります。しかし、私たちが注意すべきなのは、自分の外側で起こる出来事だけではありません。むしろイエス様は最後に「あなたがたは自分自身に注意していなさい」と言われるのです。

では「自分自身に注意する」とは具体的にどのようなことなのでしょうか。イエス様は「放縦や深酒

や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意していなさい」とおっしゃっています。
「心」とは「あなたがたの心」です。「自分自身に注意する」とは、自分の心が放縦や深酒や生活の煩いで、鈍くなってしまわないように注意する、ということなのです。
ここで「鈍くなる」と訳されている言葉は「重くなる、重荷を負い圧迫される」という意味があります。まぶたが重くなるという意味もあります。イエス様の山上の変貌の場面でペトロたちが「ひどく眠かった」（ルカ 9:32）と言われいますが、それが同じ言葉です。「まぶたが重かった」すなわち「ひどく眠かった」ということになるわけです。しかしここでイエス様がおっしゃっているのは、実際にまぶたが重くなり、眠くなるというよりも、「あなたがたの心が重くなる」こと、言うなれば「心のまぶたが重くなる」ということです。そしてそのように心が重くなるとき、心は鈍くなります。心の感覚が麻痺し、鈍感になるのです。ではどのようなことによって私たちの心は重く鈍くなるのでしょうか。

イエス様は私たちの心が鈍くなる原因として三つの挙げておられます。それは「放縦、深酒、生活の煩い」です。最初の二つ、放縦と深酒は似たような意味の言葉です。「放縦」と訳されている言葉はもともと「飲みすぎ、酔っ払って吐き気や頭痛をもよおすこと」を意味します。「二日酔い」と訳されることもあります。二つ目の「深酒」という言葉は「泥酔」と訳すこともできます。すなわちイエス様は私たちの心が鈍くなってしまう原因として「飲み過ぎや泥酔」をあげておられるのです。これらの言葉は比喩的な意味に解釈されることもあります。しかし続く「生活の煩い」が比喩ではなく実際のことですので、この「飲み過ぎや泥酔」も第一には比喩ではなく、実際のこととして捉えるべきであろうと思います。
お酒というのはある意味ではデリケートな問題です。クリスチャンの中にはお酒を全く飲まないという人がいます。改革派教会は基本的にそのような立場ではありませんが、そのような考えを持つ人たちには配慮が必要でしょう。聖書はお酒を全く飲んではならないとは教えていません。イエス様ご自身も今日のところでそのようにお酒を全く禁止しているわけではありません。しかし、全く無制限に許容しているわけでもない。「飲み過ぎや泥酔」には注意するようはっきりおっしゃっているのです。それはただ健康のためというのではなく、「心が鈍くなってしまわないため」なのです。

そして「心が重く鈍く」なってしまう原因はお酒の飲み過ぎや泥酔だけではありません。「生活の煩い」によってもそれは起こるのです。「生活の煩い」とは「日常生活の様々な心配ごと、心遣い、気がかり、思い煩い」ということです。イエス様は以前に何を食べようか、何を着ようかということで思い悩むな、思い煩うな、と弟子たちにおっしゃっていました（ルカ 12:22)。「生活の思い煩い」とは第一にはそういうことでしょう。どうやって生活していこうか、どうやって食べていこうか、ということです。しかしそれだけに留まらず、私たちは日常生活の中で様々に思い煩ったり、心配することがあるのだと思います。あのことはどうしようか、このことはどうしようか。あれもこれもしなければならない。そのような生活の思い煩いや心配で心がいっぱいになってします。そのようなとき、やはり私たちの心は重くなり、鈍くなるのです。
イエス様はそのようにして「飲み過ぎや泥酔」あるいは「日々の生活の思い煩い」で「あなたがたの心が重く鈍くなってしまわないように」、自分自身に注意していなさい、と言われるのです。
それは 34 節後半で言われているように「さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲う

ことになる」からです。飲み過ぎや泥酔や生活の思い煩いで心が鈍くなっていると、「その日」、すなわち「終わりの日、主の日」が不意に、突然、「罠のように」あなたがたを襲うことになる。そうならないために注意していなさいと言われるのです。

このことは車の運転のことを考えてもよくわかるのではないかと思います。飲み過ぎて、泥酔状態で車を運転したら非常に危険です。またお酒を飲んでいなくても寝不足の状態で運転することは危険です。注意力が散漫になっているからです。また「日々の生活の思い煩い」で心がいっぱいになり、考えごとをしながら、運転することもやはり危険でしょう。運転に集中していないので、やはり注意力が散漫になります。わたしも眠たい状態や他に考え事をしながら運転をしているとき、危ないことがありました。普段なら前の車がブレーキを踏めば、ブレーキランプがつくので、それを見てこちらもブレーキを踏んでスピードを緩めます。しかし注意力が散漫になっているときには、そのサインを見逃し、ブレーキを踏むのが遅くなり、前の車にぶつかりそうになったことがありました。その場合、急に前の車が目の前に来るような感じになります。それと同じように、飲み過ぎや泥酔や生活の思い煩いで心が鈍くなっていると、「その日」、すなわち神の国が近づいているというサインを見逃してしまい、その結果、「不意に、突然」、その日が罠のようにやってくることになりかねないのです。

しかも 21 章 35 節にありますように、「その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである」と言われています。飲んだときは運転しないのは当たり前ですが、ここで言われていることは運転しなければそれでよいという問題ではありません。その日は地上の表のあらゆる所に住むすべての人々に襲いかかってくるからです。それゆれ私たちは皆、注意していなければならないのです。

「その日」が「罠のように」、地の全ての人に臨むということは、イザヤ書 24 章 17 節から 23 節に背景があります。

「地に住む者よ、恐怖と穴と罠がお前に臨む。恐怖の知らせを逃れた者は、穴に落ち込み／穴から這い上がった者は、罠に捕らえられる。天の水門は開かれ、地の基は震え動く。地は裂け、甚だしく裂け／地は砕け、甚だしく砕け／地は揺れ、甚だしく揺れる。地は、酔いどれのようによろめき／見張り小屋のようにゆらゆらと動かされる。地の罪は、地の上に重く／倒れて、二度と起き上がることはない。その日が来れば、主が罰せられる／高い天では、天の軍勢を／大地の上では、大地の王たちを。彼らは捕虜が集められるように、牢に集められ／獄に閉じ込められる。多くの日がたった後、彼らは罰せられる。月は辱められ、太陽は恥じる／万軍の主がシオンの山、エルサレムで王となり／長老たちの前に、主の栄光が現されるとき。」

このように「その日」は罠のように地に住む者に臨み、人々は捕らえられてしまう。そしてその日は主が地をその罪のゆえに罰するときです。ではそのような日から、その日に起こる災いや罰、破滅から逃れる方法はあるのでしょうか。

２．いつも祈りつつ目を覚ましていなさい

イエス様は 36 節で次のようにおっしゃっています。

「しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

イエス様は「起ころうとしているこれらすべてのことから逃れることはできる」と言われます。そして「人の子の前に立つことができる」のです。「人の子の前に立つ」とは私たちにとって救いを意味し

ます。なぜならイエス様は21章27節28節で次のようにおっしゃっていたからです。
「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」
　イエス様は私たちを解放するため、私たちを救い、贖うために来てくださいます。それゆえ、私たちがその日に起こるすべてのことから逃れて、イエス様の前に立つことができるならば、私たちは救われるのです。ではそのためにはどうすればよいのか。イエス様は「いつも目を覚まして祈りなさい」とおっしゃいます。原文は「祈りつつ、いつも目を覚ましていなさい」と訳すこともできます。
「いつも目を覚ましていなさい」という勧めは、最初の「心が鈍くならないように注意しなさい」という勧めとつながっています。ですから「目を覚ましていなさい」とは、「心の目を覚ましていなさい」ということです。油断せず、注意を怠らず、神様に対する心の目を開いていなさい。いつ「その日」が来てもいいように、いつでもイエス様の前に立つことができるように備えていなさい、ということです。そしてそのとき大切なことが「祈る」ことです。神様に目を注いで祈る。思い煩いがあったとしても、それらもすべて神様に委ねつつ祈る。神の御国が来ますように、人の子であるイエス様が来られますように祈りつつ待ち望むことです。
　そのようにしていつも祈りつつ、目を覚ましているならば、イエス様が教えてくださったような徴を見て「神の国が近づいている」と悟ることができます。そうであれば、「その日」が罠のように私たちを襲うことはない。むしろすべてのことから逃れて、私たちを救うために来てくださるイエス・キリストの前に立つことができるのです。
　しかしなぜ「いつも目を覚まして祈る」ことがそれほど重要なのでしょうか。それはそのことが私たちの信仰と深く結びついているからです。イエス様はいつも祈るべきことはルカ福音書18章1節からのところですでに教えておられました。そこにはこうあります。
「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」
　そしてやもめと裁判官のたとえを語られたわけですが、その最後18章8節で次のようにおっしゃっています。
「言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」
　「人の子」であるイエス様が再び来られる時、地上に信仰を探されます。そしてイエス様は神様にいつも（絶えず）祈っている人の内に「信仰」を見出されます。そしてそのような人はすべての災いや罰から逃れて、イエス様の前に立つことができる。それゆえに「いつも祈りつつ目を覚ましている」ことが決定的に重要なのです。
　私たちは生活の様々なことで心が重く、鈍くなってしまいがちなのだと思います。しかしだからこそ、「いつも祈りつつ目を覚ましていなさい」というイエス様の御言葉を心に刻み、イエス様が来られるその日に備えていたいと思います。